

またおはし 「榮玉の巻、十二」七寶のまたおはしにひびく

またおはし 「夫、廿六、公朝」我君をまたおはし

のる時なれ北にもかゝる宵の行ひ 「注」息災法は北に向ふなり時は初夜を取てはじむ ○北辰祭か

またお 来 「源、蓬生、十三」大貳前侍従のむかへになんまりきたる

またお 着垂 「枕、九、二」なほすびつにまなむる人々かゝる

またお 来立 「萬、九、十八」かたはし人のまたおは

またお 兼輔集 「後、三二」人はかゝるころのうちはまた

東風 「三」守もあし人にもあはらひり上達部のすぢにてな

ひる物またお人ならず 「榮、松の下、枝、五」いし

くひ奉らば給へは御ぞ奉りかゝるほほもめたし 「神代紀、上、廿

二」吾元無 「黒心」源、明石、十五」の事もみりて物また

なからすよ 「またお」は 「萬、四、五十四」

時にか妹を律生の穢 屋戸爾入まさせなん またおむ 「發心

集、四、九」此病にいたりてはいとひまたお人のみありてちかづ

つから人はあゝかからす

またおむ 「源、帯水、十」かたはまたおむ若やかなるほほの 「同、推

本、六」のいじめる人もまたおむ 「同、未納、廿三」またおむ

ひらひらひひつけたるこし 「同、玉葉、十」手なまたおなう書て

「伊勢物語、百三」段の歌のまたおは 「大和物語、四」先帝の御時

にあらみらうじにまたおはありけりみかを御らんじてみそ

か 「密」にめしてけり 「竹取、翁訓」かたはけなくまたおなる所に年

月経て

またおむもの 「宇治拾、十二、九」もまたおむ物を大なりと聞しめ

したるか人のよりは大に候へども今はわりきりのやうにたたくと

なりたる物を

またおむかた 北方 「源、桐葉、三」母またおむかたなんいにしこの人の

よしあるにて 「同、蓬生、七」領の北の方になり給へるありけり

またおむかた 北叟 「夫、廿五、知家」いしこの北の翁もある

のまたおむかたに世をなげく 「土御門院集」心をは北の翁に

なすもまた立かゝる駒だに 「夫、廿五、衣笠内大臣」心をは

いかにならはん方もなし北の翁に身はなりぬ

またおむかた 「源、若菜、上、六十五」北の政所 紫ノ上ノ別

當ても人々ひびく云々

またおむかた 北の藤波 「詞花、雜上、師頼」春日山北のおち

なみ咲しよるかゆいとはかわてしりに 「袖中抄」藤氏の四家の

中に北家は一の人の流れ也それを北の藤波とはよむ也 「新撰

古、雜上、前大僧正道意」かすが山よそに成れる身にしあれば立か

り見る北の藤波 「新古、賀正、賀正大臣」春日山みすこのみなみ

しかぞおもむきたのちぢなみはるはあは

またおむかた 北風 「堀百、海路、仲頼」もどめ塚おまにかゝる柴舟の

またおむかた 「なりぬ」よるかたなみ

またおむかた 「字鏡、針支太不羅支太比加羅」著聞、十六、十七」方々にけ

のたれにけられまたおむかたはたれたるはよりて

またおむかた 「詔訓解、六、四十五」支多米は罰字の意に當れる言

也皇極紀に東國不盡河邊人大生部多勸祭山於村里之

人一日此常世神也祭此神者致富貴壽延等遂託記

於神語曰云々於是萬野秦造河勝惡民所感打大生部

多云々時人便作歌曰再都麻佐波柯微騰母柯微騰母柯微騰母柯微騰母

曳俱屢騰舉預能柯微乎宇智岐多麻須母この岐多麻須にて

此言の意をいふ

またおむかた 「大和物語、三」いとかうはしきかみにきれなる髪をすこしか

いわかぬ 攝關てつゝみたる 「和泉式部集」宮法師になりて髪をきれ

おこせ給へる云々 「髪のはしはし也」

またおむかた 昨日 「萬、二、廿三、長歌」衣ならはぬ時もなくわがこゆる

君ぞその夜のいめにみえたる 「同、四、十八」昨夜雨爾

きろく 「續古、神祇」白河院御時あゝる外の事にて御きそく心

よからす侍りける時云々 顯輔 「文粹、卅、七」善相公奉有丞相若夫

此人恐墜此文重望賜其氣色私寬慰聊傳恩裕之旨

以繫才士之心 「朝野群載、廿二」出行初日云々不寄寺中

不寄社頭云々但今世之人亦隨氣色一耳 「枕、一、廿九」我

御きそくよろしからざりければ暇も申出まじきなりとおもひ

つるに 「宇治大納言物語」我を老たりとおもひしそく云々 「徒然、十

五段」あなたをのけしきそくを信仰のきそくありければ 「抄」氣色

也

またおむかた 「萬、五、廿九」布かたきぬありのこくもそくも寒き夜

すらを云々 「同、十七、十二」かきつはた衣にすりつけますらをの服會

比獵する月はまじけり

またおむかた 「萬、十六、十七」さすなごにゆわかせこもいひひのひはしよ

りこんきつにあむさん 「教長集」狐のなくと聞て 「さく」人のさかゆとまけ

は夜をむむみななるまじつをあはれをささく 「伊勢物語、十四段」よもあ

けはまじつにはめなまじつにたかけのまたおむかたにまじつをささく

またおむかた 急度 「蓬葉、十一、十二」云々よみて涙をみたりけんこもま

つと思ひ出し給ひつ、袖をささくほし給ひける 「同、十一、廿二」宿

所におちつき給ひたりければ宰相をほしめ奉りみまざるこびの涙に

むせびて急度のいふ人もなかりけり 「平家、七、三十三」かゝるそ

げきの中にもまみの御なごりまじつと思ひ出參らせ仁和寺殿はせ

參り云々 「同、四、十二」是もつてあゝのちすちかゝるもつ行まじつと見

かゝるせてかん状をもとりて參れとぞ仰ける 「著聞、十六、廿二」た

今内裏急度まらせ給へ 「平家、二、十」るんの御所へ參り大膳

の大夫をよび出てまじつと申さんすることよはよ

きね 「水鏡、飲明段」此めの女おきねをきてやかんになりて云々
 そのうちきね侍りてきねは申さぬなり「源、手習、五」狐は
 るこそは人をおびやかせせしこころはあつたつていふはきねのなれた
 り「土御門院御集」きねたにかけをうかふ山川の氷のうへをよみ
 てのみゆく「拾遺、上」つかあるき狐のかれる色よりもよきまよひに
 そむる心よ「月清、一」「故郷の軒のひはたに草あれてあはれきつ
 ねのふし」こころ哉

きつね 狐戸「著聞、九、二」鬼同丸云々 狐戸より入て頼光
 のおたる上の天井にあり「同、十七、十二」寝殿のきつねに入て侍
 けり

きつねつかひ 「中原康富記」應永廿七年十月九日甲辰因
 入室町殿醫師高天昨日被流讃岐國一俊經朝臣同國被
 流之云々是等皆狐仕之輩也

まつねや 狐矢「新六、五、知家」「人ごころたのまれがたままつね矢
 はた、そのまゝにまた音をせぬ

きつね 「道與准后廻國雜記」なるこにはおきねの鹿もつねひのきつ
 なたなまかはなれざるらん「漢國草、十七、廿九」き世のつねまつ
 ねと同心也はなれがたま心なり「長門本平家物、十七」これをほし
 とらひきつねを名づへるも云々「平家物、十、卷」縹キツナ「盛衰」縹キ
 ツナ「太平記」縹キツナ

きつね 來着「源、東屋、五十八」ながめくもしてなんまづきける「伊勢
 うらみ

物井殿「かへりこころは京にきつね、なんもてきたりける
 宜禰と梓「六帖、一、上、素性」「拾遺、夏、野恒」「神まつるう月にさ
 けるうのはなの白くもきねがしらけたる哉「拾遺、夏、廿二」屏風にかぐ
 らする所の歌「足引の山のさかきほはななるかげにけりかゆる神の
 きね哉「かき、一」「小大君集」「みづかきのあたりになれぬきねより
 も神にいぢじるし今はかき、し「天、廿二、寂蓮」も深ききねのお
 くの松風にきねがつ、みのかたをろしなる「忠見集」四月家のかみま
 つる「年ごにまつらんかすはきねをみんいた、くかみのしりくるまで
 に「能宣集」「宮人のたける庭火のおきあかしこゑくあそぶ神のき
 ねかも「拾遺、四」「わかばかりうれしかりなんきねが鈴のふりすて、
 ゆく道をせかすは「金葉、連歌」「しめのうちにきねの音をきこゆな
 れいかなる神のつくにかあるらん

きね 來馴「源、東屋、廿六」例こなたにきなれたる人にもあらんと
 おもひて

きなれ 着馴「右京大夫集、四十二」「きなれるころものはてのなり
 までもたいその人を見るこ、ちして「新古、離別、讀人不知」「きならせ

はれぬきね身をわかたせん
きね 「英三、上、九」若君ノ詞おきねはよしな嵯峨の院こそ頭は
 きつねとしておきねをいけなれまづおきねをいけなれまづおきねをい
 しまち「源、明石、八」みあげ給へれば人もなきて月の顔のみまづ
 ちして夢の心ちをせず御けはひをまれる心ちして「同、野分、九」日の
 わづかひて出たなられかほなる庭のつゆまづくして「同、常
 夏、五」いせものまづくしくかひある所つき給へる人にてよきあし
 けちもあはれかたにまてはせし「神代紀、下、廿四」聞ニ其兒 端正
 「英三、上、七」ゆづりのはのいみじくもあはれかたにまてはせし
 あからうらうらしく見きたるこそいせしけれもまかしかれ「同、六、十
 七」みあかし常灯にはあはれうち人に人の奉りたるおきねし
 えたるに佛のまづくを見え給へるいみじくもあはれかたにまてはせし
 治拾、九、五」猪のし、の出て石をばらくしてくたけは火まづく
 づ「著聞、十六、十二」まづくしてわらひてまづらひけり「同」御返事
 をは申さた、まづくしてのむわらひけり

きね 「源、東屋、八」直衣はかりをしきげなく着なしたまひて「同、夕
 顔、三」まづかきまづかきまづかきまづかきまづかきまづかきまづかきまづかき
 びむくまり出たきねはなれはあつてつかまつらせ給ふま
 にもあらず物まづかにならひてよき人をえらせたまへり「同、九」今
 宮のまづかにはおはします「徒然、十段」いまあかしまづか
 かならね木たちものふりて「榮、様々、三」御前の人みなくやんこ
 とかなんまづか、かななるかきりをえらせ給へり

きね 「源、東屋、廿二」天皇大御靈多知乃穢奴等平伎良比賜
 弄賜布爾依氏「源、三、廿九例」ナ多シ。「詞花、冬、成律師」「かす
 ならぬ身はるるのつものかな老は人をまづかにはざりけり「拾
 玉、四」花をまづかのあはれにたのむ春なれば見にくる友をまづかの
 かは「きねはるる」玉葉、釋教、法成寺入道「たねくちて佛のみ
 ちたねはれし人をもすての法をこそまけ「散木、十二」光佛の名を
 人々よませしよめる無量光佛「心してかすはかりなき光にもまづ

ゆたき 「新六、五、矢」「ゆたきは昔ゆたのりつりの外まき...」

ゆたぬ 和訓栞云、委字をあり日本紀に見ゆたに...

ゆたぬ 「存取」「此子を見つて後に竹...」

ゆたぬ 「秋、六、五」方臥ガ所ナリ 除目の中の夜...

ゆたのたゆた たのたを重なる言也(萬)...

ゆたけ 「後拾、神祇、讀人不知」「あめのしたは...」

ゆたけ 「秋、十二、十一」夏うつものかたつ...

ゆたけ 「源、東風、廿三」ゆたけまほひをたのみ...

ゆたけ 「萬、八、四十九」まほひのまほひのその長濱...

けく君をとも此頃

ゆたて 湯立 「中原麻呂記」文安六年九月廿九日粟田口明

ゆたぬ 「源、夕顔、五十」あまた佛でゆり奉る...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「萬、十四、廿五」...

巻九 杠ヒツリの歌に「年ごにこのまおつる親子と人にしたしき

人やしるらん(兼盛集、廿五)十二月大雪のふれるに家に男かしら

ゆたぬ 「源、夕顔、五十」あまた佛でゆり奉る...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

ゆたぬ 「源、若菜、上、廿八」かたははゆたゆた...

さ鐘の音もせなくは「萬十、廿六」「ゆづり、も通や天路をうづまでかあきて待む月人男」

ゆづりけの夕月夜「古、秋下、其之」「ゆづり、夜をさるる山にさ

鹿のこゑのうちに秋はさるる「源、桐壺、十」「ゆづり、の命婦さ

ゆづり「古、戀一、讀人不知」「夕づへ日さすや岡この松のはの

ゆづり「信明集、廿三」「ゆづり、はなはなゆづりけのわかず聲にさ

ゆづり「古、戀四、閑院」「逢坂のゆづりけ鳥にあらはこそ君

衣たつたの山にさるはなはな「古、戀一、讀人不知」「あや坂の夕づけ

ささ行の朝臣「あや坂のゆづりけになく鳥の音をきこりてかみすゆき

ゆづり「源、末摘、十六」「ゆづり、おんなの老人なまほほうしにたて夕

ゆづり「源、若葉、四十九」「ゆづり、さき人々ゆづりけてこそはむか

ゆづり「源、若葉、四十九」「ゆづり、さき人々ゆづりけてこそはむか

ゆづり「源、若葉、四十九」「ゆづり、さき人々ゆづりけてこそはむか

ゆづり「源、若葉、四十九」「ゆづり、さき人々ゆづりけてこそはむか

大響の又の日のゆづりけにさる給なり「同、常夏、五」「ゆづりけ

ゆづり「湯船」「宇治拾、十五」「湯船をゆづりてはたてその下に

ゆづり「玉葉、四、廿二」「ゆづり、の野端のゆづりけはあか

ゆづり「萬、三、十八」「あやみのみ夕なみちをりながら

ゆづり「新後冬、公實」「ゆづり、の浦の松を

ゆづり「風雅、冬、風輔」「近

江路を野鳥か崎の濱風に夕波をりて立ちまむなり

ゆづり「千載、具、仁和寺法親王」「ゆづり、さきなほ初聲をけの山

ゆづり「平家物語、廿三」「ゆづり、の料にて白布五十

ゆづり「堀次、兼盛」「入日はさるる岡邊の岡つ、じゆふ

ゆづり「新千、難波、小侍籠」「ゆづり、の夕紅

ゆづり「玉葉、春、三河」「入日は

りて春をけくかのゆづりけの雨

ゆづり「玉葉、夏、入道前太政大臣」「秋ちかき谷の松風おた

ゆづり「同、同、為十」「風のゆづりけはさき

ゆづり「同、同、為十」「風のゆづりけはさき

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

ゆづり「源、若葉、三」「ゆづり、のみちた

つらうあまのふたもたはたれて 例がむかひのたげありとせ給おほ
けしらすまもまてしむるはればは御風をまてのまを給ひてのほ
らせ給おほしに御口鼻より血あふまるとり給ひぬおほし御膝を
おきけつなきのしり給ひたまにのかひかあらん 同、玉の村菊、十「か
かるはたはにかがしけん 大将殿日比御心ちなましくおぼゆる御
風なまごにちよて御ゆりてせ給お同、後悔大将、二「いつたひごかにて
男君生れ給ひぬ御心ちなまご中々例よりはひちまはるかには御ゆ
りてはたまを給へば誰をもまご心のかにおほし見奉らせたまふ
云々年ふつれたけりつゝのたがな事をもおぼゆることなげなるに殿の
御ありまごなかりければ云々けはは七日にて御ゆりのあまをければま
なまごりの御ゆりのことおもひたまふのしるほほに「續詞花、雜上
大齋院御足なまを給ひを杉のゆにてゆりて給ひたまふし申け
れば云々

ゆきぬ 「新後撰、旅」たがまのゆあまにまかりける道に云々、「玉佐日
記」男女これかれゆあまをせとせあたりのまごしに所におりてゆ
く「枕、七、二十八「またなげなる物、あつゝほほに久しゆあませ、十
「春曙「古、離別、しるも「源のむかひつゝのあまにてまかりけ
る時に云々、【】公任卿集」「柿山におるす後もあるものゆのみをあ
むで人のいあらん」宇津保藏聞、上、一、十八「かくて女御の君がむ
なまごりゆりて給ひければ云々、つゝのあまにたまはつゝのま、御ゆり
のあまのり給ひ

ゆきぬ 「宇治拾八、四」此倉すゝろにゆきぬくもいふる
ゆき 「夫、四三島社奉納、公卿」川むかひゆきぬの山のわか櫻たをりて
もこん我にわかぬせ
ゆき 轡「徒然、二五三段」勅勘の所に轡かくる作法今はたそし
れる人なし
ゆきはつかしき 「源、末摘、廿五」雪はつかしう白うてまをに「蜻蛉
日記、中、下」あまのゆ雪はつかしき霜かな
ゆきはなれ 「源、蓬生、十六」てし頃わびつゝ、ゆきはなれまをける人
の「同、神、初」浮世をゆきはなれなるとおぼゆる「同、恒集」「あま玉の年
ふりつる山里にゆきはなれぬを我身なりけり
ゆきはまると 「古、雜下、説人不知」「世中はつればかてしてわかちん
ゆきはなれぬとまをきたまひぬ
【】雪はつかしき 「拾玉、一」「雪はつかしきの雪のおもたえぬはよほのあま
してたるはひりぬりて
ゆきはふらふらふ 「伊勢物語、四段」心がてしか、りける人ゆきぬをさひひけ
る
ゆきぬ 「源、末摘、三」かはる人々もえしもありはつゝ、ゆきはつかしき
「同、總角、五十四」京にまるとまご所々に行ちりたる娘も云々、尋ねよ
せて参らせたり
ゆきぬ 「源、竹川、四十四」ゆきぬが車のおもひたまふまごあま
も「同、源舟、三三」柴つみ舟のまごうづくにゆきぬがひたるまご

ゆきぬ豊年の非とす

ゆきぬ 「萬、十九、家持」「あたらしきまごしのはしめに
豊のゆりてしるまごりゆのゆきぬは
ゆきぬ 「新古今雜上、俊成」「袖をまを木するまごも雪をたにたえ
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお
ゆきぬ 「源、末摘、九」おのく契れる方にもあまをまごゆきぬわかれ給はず
ゆきぬ 「伊勢物語、九十二段」「あまごなまごし小舟いゝをた
ゆきぬ 「源、早葉、十九」げにお

ゆきぬ行方

ゆきぬ 「源、末摘、三」是は父君のまごを里にて行かよら「古、戀
二、成行」「戀わびて打ぬるなかに行かよら夢のた、おはうつゝ、なま
ゆきぬ 行方 「玉、雜戀、其之」玉藻かあるまごゆきぬかたまを棹の
なまごや人をうらみわたらん
ゆきぬ 「後、春上、讀人不知」人心ゆるこそまされ春たてはまご
らまごゆるゆきぬかくなん 「拾、戀、五」新古今、戀五、讀人不知「いつかた
にゆきぬかくなん世中に身のあればこそ人もつづけられ「續古今、哀傷、離
同三司」「誰もみな消のこるまご身なまごゆきぬかくなれる君をまごな
しき【】玉葉、戀、一、素性」「うちたのむ君かこるのつらからは野に
ま山にゆきぬかくなん
ゆきぬ 契云ゆきぬかは行代るなり「源、早葉、初」行かよら時々
したがひ花鳥のいろを音をも「同、橋姫、廿七」おのく何とまご世
のいとなまごに行かよらまごの「古、夏、初恒」夏も秋もゆきぬ
空のかまひはかたすゝし風をふらんと「同、序、たとひ時つり
こもつたのしひかなしゆゆきぬかよら「土佐日記」「しるたこの波
路をまごゆきぬかよらわらぬらまごなまごゆきぬかよら「源、桐葉、八」御
使のゆきぬ程もまごゆきぬまごゆきぬかよらまごゆきぬかよらまごゆきぬかよら
「同」百敷にゆきぬ侍まご事まごしていははまごゆきぬかよらまごゆきぬかよら○契

云、陳鴻長恨歌傳云時移事去樂盡悲來 田「思見集」「雪は

かた行かふ舟のしななははくろくを見えぬゆゆのまをなみ

ゆきや 雪夜「夫、十八、家隆」「高杉の松のねくらをなれぬらん雪夜

の鶴はうらみなくさ

ゆきや 雪「宇治拾、廿七」「ゆきやのゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきやゆきや

ゆきあひのなみ

〔萬代、夏、仲實〕「ゆきあひのなみ」ゆきあひのなみ

ゆきあひのなみ 〔夫、八、後九條内大臣〕「ゆきあひのなみ」ゆきあひのなみ

住よしの行あひの雲のひまをなみたる

ゆきあひのなみ 〔伊勢集、廿一〕「六帖、一、下」「ゆきあひのなみ」

の霜にうけてはゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、夕顔、八〕ゆきあひのなみたる

「朝米をけけけいな水のおもひにゆきあひのなみたる」

花、秋、好忠「山里はゆきあひのなみたる見えぬまは秋のこのはゆきあひのなみたる

れはゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

のゆきあひのなみたる 〔源、雪宮女御集〕「ゆきあひのなみたる人」ゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、夕顔、八〕ゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ

あひみんこころ

ゆきあひのなみ 雪の夜なり 〔源、朝顔、廿二〕「かきつめて昔こひしき雪も

よてあはれなきをさるるのうきねか 〔新古今、通具〕「草も木もふりま

かいたる雪もよに春まつ梅のはなのかぞける 〔和泉式部集、上〕海づ

らに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

にすゝろに應ずるたるたび人雪ふりたり」そなたつ鳥たにみえぬ雪もよ

威儀のなみ 〔萬代〕「ひかげす雲の上人ゆきあひの山るのころ

もいゝかきねつ 〔風雅、旅、經家〕「ゆきあひの衣にうれ萩が花旅の

しるし人にかたらし

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

ゆきあひのなみ 〔源、維木、廿九〕雪をなみたるゆきあひのなみたる

めなれず 「源、自宮、十四」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれず御 「源、自宮、十四」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 妻かぬ 「宇津集、巻二、廿二」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ おのめかぬ人にならばしめてはありなむ

めなれ かねの心 「古序」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、自宮、十五」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、紅葉集、十五」人めだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 物から 「新古序」これみな人のめだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 心はさむらひな故に云々 **めなれ** 「統、十、十四」みなの御事は

めなれ 親をたのむは親をたのむは子にめだつまじへなしたまふ

めなれ 「源、梅枝、廿七」宮の女御はめだつまじへなしたまふ

めなれ 「同、桐葉、五」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 立成馬道 能書米等 向、堂之道也 「統、十、十」みなの御事は

めなれ 「大鏡」御湯殿の馬道の戸口

めなれ 「源、浮舟、六」句中若、宇治ヨリ文ヲ送ルニ云々

めなれ 「源、早良、十」御、早良、紅梅のいろもかたじけなく

めなれ 見なれぬ打なれぬわなめなれぬはみだりてははるもむ

しのめなれは給ふちの御物語に 「後集三、中務」

めなれ 難懸人不知 「うめれ木は中むしはむしはめなれはくめなれはしは

心してゆけ

めなれ 額額 「源、拾遺、初」花づくさのおほひなをかしきめなれは

めなれ 梅涅掃わが梅豆留古羅 「源、紅梅、十三」はなのかたはほはすもを

めなれ 「六帖、二、下」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 初ねはすむらひな故に云々 「天、十八、信實」諸人のむれても庭に

めなれ 年もはた

めなれ 「源、夕顔、廿九」おもかげにみまふおもかげにみまふ

めなれ 「伊勢物、十四段」なる女京の人はあつら

めなれ 「源、明石、六」このお

めなれ 「同、夕顔、廿二」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 給ふちの御物語に 「同、夕顔、廿七」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ たる女人かな

めなれ 「小大君集、十五」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「宇津集、巻二、廿七」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、未摘、二」なびまふおもかげにみまふおもかげにみまふ

めなれ 「同、帯木、初」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「同、桐葉、六」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、自宮、十四」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、紅葉集、十五」人めだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「新古序」これみな人のめだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「統、十、十四」みなの御事は

めなれ 「大鏡」御湯殿の馬道の戸口

めなれ 「源、浮舟、六」句中若、宇治ヨリ文ヲ送ルニ云々

めなれ 「源、早良、十」御、早良、紅梅のいろもかたじけなく

めなれ 見なれぬ打なれぬわなめなれぬはみだりてははるもむ

めなれ 「源、自宮、十五」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、紅葉集、十五」人めだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「新古序」これみな人のめだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「統、十、十四」みなの御事は

めなれ 「大鏡」御湯殿の馬道の戸口

めなれ 「源、浮舟、六」句中若、宇治ヨリ文ヲ送ルニ云々

めなれ 「源、早良、十」御、早良、紅梅のいろもかたじけなく

めなれ 見なれぬ打なれぬわなめなれぬはみだりてははるもむ

めなれ 「源、自宮、十五」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、紅葉集、十五」人めだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「新古序」これみな人のめだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「統、十、十四」みなの御事は

めなれ 「大鏡」御湯殿の馬道の戸口

めなれ 「源、浮舟、六」句中若、宇治ヨリ文ヲ送ルニ云々

めなれ 「源、早良、十」御、早良、紅梅のいろもかたじけなく

めなれ 見なれぬ打なれぬわなめなれぬはみだりてははるもむ

めなれ 「源、自宮、十五」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、紅葉集、十五」人めだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「新古序」これみな人のめだつまじへなたらかにもてなしたまふ

めなれ 「統、十、十四」みなの御事は

めなれ 「大鏡」御湯殿の馬道の戸口

めなれ 「源、浮舟、六」句中若、宇治ヨリ文ヲ送ルニ云々

めなれ 「源、早良、十」御、早良、紅梅のいろもかたじけなく

めなれ 見なれぬ打なれぬわなめなれぬはみだりてははるもむ

めなれ 「同、桐葉、三」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「神助紀、三」希見此、三、梅豆羅志、一、源中紀、六、歡、其

めなれ 希、有、神代紀、下、廿三、有、一、希、客者、一

めなれ 「源、梅枝、十六」火トリソノカケ玉ノ所ニ、心たか

めなれ 人の御有るまじりもつま

めなれ 「同、帯木、廿一」これよりめなれぬはみだりてははるもむ

めなれ 「高、二、廿二」もつ月のいろもめなれぬはみだりてははるもむ

めなれ 「源、少女、廿三」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めなれ 「源、今昔、一」みなのおはしは世のめなれは朝夕に御

めらら...めんぼ

めららし 目馴「源、二、上、廿」かへつねの給あり...めんぼ

めんぼ 龍王めく...めんぼ

めららし 顔のほほ...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めんぼ...めららし

二千百四十八

めんぼ 心は...めんぼ

めんぼ ぼくある...めんぼ

めんぼ らに立給...めんぼ

めんぼ 出する...めんぼ

めんぼ 出する...めんぼ

めんぼ 出する...めんぼ

めんぼ 出する...めんぼ

めらら...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めらら...めんぼ

二千百四十九

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

めららし 何面目見...めんぼ

てははしてけるをなしたるに、さし奉りける「源、多、三、四」のちをなすはははなり
 してははしてけるをなしたるに、さし奉りける「源、多、三、四」のちをなすはははなり
 給ひたり○北邊隨筆を云、の親をいふ事あるはみな名なり
 給ひたり○北邊隨筆を云、の親をいふ事あるはみな名なり
 給ひたり○北邊隨筆を云、の親をいふ事あるはみな名なり

大將に御目くはせみそかによませ給ふ「伊勢物語、百四段」「世をうみ
 のあまごし人をみるからにめくはせよとまたのまゝ、かな「源、多、三、四」
 一「ついでつひめくはす」項羽本紀「須史梁、胸」精、師古曰動目而使
 之也「源、多、三、四」廿三「むいちかためしてよせめてめくはせたまひまじ
 かは「文選、風原賦」滿堂美人忽獨與、余、目成
 めくはせたまひまじ
 二「九」公卿殿上人僧たちこれまきにはあまましく目くちはたかり
 てははは

源、多、三、四「源、多、三、四」廿三「むいちかためしてよせめてめくはせたまひまじ
 かは「文選、風原賦」滿堂美人忽獨與、余、目成
 めくはせたまひまじ
 二「九」公卿殿上人僧たちこれまきにはあまましく目くちはたかり
 てははは

源、多、三、四「源、多、三、四」廿三「むいちかためしてよせめてめくはせたまひまじ
 かは「文選、風原賦」滿堂美人忽獨與、余、目成
 めくはせたまひまじ
 二「九」公卿殿上人僧たちこれまきにはあまましく目くちはたかり
 てははは

宇津保、嵯峨院、四十七「四面めぐりたるし馬車もささぐみみす」
 代紀、上四「陽神左、陰神右、旋」清正集「里めぐりたるか
 らの心もささぐみみす」源、多、三、四「むいちかためしてよせめてめくはせたまひまじ
 かは「文選、風原賦」滿堂美人忽獨與、余、目成
 めくはせたまひまじ
 二「九」公卿殿上人僧たちこれまきにはあまましく目くちはたかり
 てははは

源、多、三、四「源、多、三、四」廿三「むいちかためしてよせめてめくはせたまひまじ
 かは「文選、風原賦」滿堂美人忽獨與、余、目成
 めくはせたまひまじ
 二「九」公卿殿上人僧たちこれまきにはあまましく目くちはたかり
 てははは

御前においでして... 源氏物語... 御前の御覧は... 源氏物語... 御前の御覧は...

その後には... 源氏物語... 御前の御覧は... 源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし...

源氏物語... 御前の御覧は...

めし 召「給、雜上」... 源氏物語... 御前の御覧は...

めしつかひ 源氏物語... 御前の御覧は...

いふ人々たに「孟てかけもの、やうなる人なり」(同、初集、十六)か
よび給ふ所あまた聞えめしむるをかくけなるのりする人をもな
なくすあまた聞ゆる「祭、撰、廿五」大石のて頃やめめておはし
まは御めしむるの内侍のすけのおぼえし月になつた、權の北の
方にて「宇津保、後陸、五十九」おぼくのめしむるあつたあつたおぼ
給ふ

めしまつはす 「源、竹山、二十八」あけくれままのめしまつはつ、
「同、相葉、卅」源氏のまきは上のつねはめしまつはせは心やすくさ
すまはして給はす

めしめ 體の語「源、紅梅、十二」今夜はものおなりのあつておなだ
にまわつてつれば東京をまへまゐるす「清閑、九、十」弓矢を
身のあつるめにあひてめしめにあつてつる恥にてもす「宇治拾、十
十」たてかめしめめよ仰たえられて廿日あまひ候ひける候に
此しなるとをこころめてつらわはせはしててめしめはゆりてけ
るを「古事談、六」伶人助元依「府役解怠事」被「召籠」左「選
府下倉」「清輔集」二條院の御時殿上の番かたりとてしはすの
廿日あまひ候ひてつらわられたるなり「宇治拾、三、廿」まをたし
めしめはつて給はす

めしめしめ 「拾、雜上、廉義公後院にすみ侍りける時歌よみ侍り
ける人々召あつて水上秋月といふ題をまはせはよりける左大
將源時

めしあけらる 「伊勢物、廿九段」むかし東宮の女御の御かたの
花の賀にめしあけられたりけるに近衛つかさなりける人
めしひ 「玉葉釋教、高辨上人」めしひたち龜の浮木にあふれや
たま〜たる法のほし舟

めしもの 「宇治拾、七、十四」あつてまひまた、みなあつて水遠
かんぱれとこころせせ給ひたればめしものほこ、にてまのすま
りてて夫をもりなしてつみ〜ませ食物し出したれば

めめひ 姪又姉 「宇鏡」嫡奥女又女比「和名、三」釋名云兄弟之女
為姪云々、和名米比「後拾、雜四」義忠朝臣物いひける女のめひなる
女に又すみすり侍りけるをまつつかはしける

めもはる 「和泉式部集下」い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い
はつたつとせめしめはかりたは思ひおこせ「古、雜上」伊勢物、四十
一段「紫のいろこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれりける

めもがらふ 「源、繪合、十三」今めかしうをかしげにめもがらふ
で見ゆ「英、二、上、四十一」めもがらふのうに〜れなるのうにたるが
色もつらなげなげなげなげなげなげなげなげなげなげなげなげなげな
るは

めもたゝかす 「宇治拾、十一、十」めもたゝかすよ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
し〜らふ「同、二、廿四」梅のめもたゝかすあつちりめもたゝかす〜一時は
かりたすなり

めもたれ 「伴、長十郎」この事をなぐりて〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
もたれ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたせ 「源、海鏡、廿十」あつちり〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたせ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたへ 「枕、十一、九」大行達導師参り回向しほし〜ん〜ん〜ん

めもたふ 「源、繪合、十一」か〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたはす 「月浦、三」霜のゆる杉の板まのめもたはす誰まう
袖に月〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
後〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
冬〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたせ 「源、繪角、廿七」今〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
き〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
の〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
そ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたふ 「源、若葉、十九」眼云々〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
御〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
に〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
め〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
に〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたら 「方丈記」かはりゆ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
こ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたふ 「源、繪木、四十六」めもたふ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
「同、夕霧、五十八」おぼ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

めもたふ 「宇治拾、十五」大將のきみもなみたに〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
給〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

あまのり 海萌黄の色「古、春上、紫上」「...

あまのりのはやし 「夫、廿、長明」「はる過よ人のこゝろはよきた山み...

あまのりの洞 「風雅、雜上、院御製」「雲深きみずのほとけにすむ月...

あまのり 「拾、戀一、兼盛」「あふこはかたのりするみずりこのた、...

あまがむ 「源、蜻蛉、卅四」「人みとがむはかりおほきなるわははえし給...

あまのまきはひ 「神代紀、上、四」共爲夫婦「同、遵合「願季集」...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「夫、廿、長明」「はる過よ人のこゝろはよきた山み...

あまのりの洞 「風雅、雜上、院御製」「雲深きみずのほとけにすむ月...

あまのり 「拾、戀一、兼盛」「あふこはかたのりするみずりこのた、...

あまのり 「源、蜻蛉、卅四」「人みとがむはかりおほきなるわははえし給...

あまのまきはひ 「神代紀、上、四」共爲夫婦「同、遵合「願季集」...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

あまのり 「源、三、修理大夫願季」「いかにかりみとのまきはひちぎりありてお...

「古、蘇二、興風」君こる涙の床にみ
ちりればみきく…し…我はかりぬる「土佐日記」みきく…し…のりもよ
り出て、みきく…し…川尻に入云々「萬、十四、十五」もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

身をかたむけ

「古、蘇二、興風」君こる涙の床にみ
ちりればみきく…し…我はかりぬる「土佐日記」みきく…し…のりもよ
り出て、みきく…し…川尻に入云々「萬、十四、十五」もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「古、蘇二、興風」君こる涙の床にみ
ちりればみきく…し…我はかりぬる「土佐日記」みきく…し…のりもよ
り出て、みきく…し…川尻に入云々「萬、十四、十五」もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

夕霧、廿、アサリ詞女人のあしき身をうけ長夜のやみにまよひは
身をかたむけ「源、若菜、七、廿七」物ノケ詞命もたまじく身をうけ
ておほしきこころを見奉れば
身をおはせたる「古、伊」かの御時に云々柿本人丸なん歌のひじ
りなりけるこれは君も人も身をあらはせたりといふなることし
身をしてる雨「和泉式部集、上」「おほつかなたれぞむかしをかけたるは
ふるに身をこる雨かなたか「源、深舟、四十五」「つれくを身をこる
雨のなままは袖を「い」とみかかちまはりて「伊勢集、廿五」かたみに
も身をこる雨のかりかき我をせせめす君もこしかは「和泉式部
集、下」「みし人にわすれられてさる袖にこそ身をこる雨はいつもをま
ね「六帖、一、下」「天のはちなるかみいかにおもむんけおはみきする
雨こそあれ「古、蘇二、伊勢物、百七段」「かきく…し…に思ひおほすは
ひかたみ身をこる雨はありとまはるる「伊勢集、二、讀人不知」「わ
す…し…身をこる雨はありとまはるる袖はかりこそかきはさうけれ「新古今、
蘇二、推尊親王」「さかしのむかしてさかしのさかしのさかしの身をこる雨のた
りなりけり「正明云、便はその縁をいほほ事の事なり」
みきく…し…「夫、八、四行」「ひろせ川渡りのせきのみをこるしみか
さかきしてみきたれのころ「伊勢集、十、五、親原」「みきたれは水のみか
さかきしてみきたれのころ「伊勢集、十、五、親原」「みきたれは水のみか
さかきしてみきたれのころ「伊勢集、十、五、親原」「みきたれは水のみか

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

「源、夕顔、廿四」かひはらへてあまきし…もほつあらみ
いなほを江の水平都久思あれをたのめてあまきしものを「延喜式、
五十」雜式云凡難波津頭、海中立、落標、若舊標、朽折者、搜求、
拔去「萬、十二、廿五」水咫、衝石心、盡而、信友云みきは水脈の
字をあらたむ本義に、其水脈の標をみきく…し…云々、落標
のたけ、合なり、ついで、ついで、助辭…し…は、鏡の義なるし、みきく…木
みきく…板、みきく…みきく…みきく…し…みきく…は、水咫、衝石と書
るは、みきく…ついで、ついで、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
て、書なるは、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、
みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、みきく…の、

もの、かたむけのひささりにみられ給はるは、ひささりにみられ給はるは、
わたしたは「拾玉、四」郭公柱の梢の見わたしたは中をこらへしむ
つの一むき

「後拾、親原、道徳」みわたせばみきく…は、近なりけり
みきく…の山はみきく…なり

「伊勢物、百七段」雨のかりぬるをみたかき見わたり侍
る「源、権木、廿三」みわたつひ給ひて

「伊勢物、十七段」云々うせたまひてな、七日のみわさ女祥
寺にてしりり云々そのみわたせにまうて給ひて

「源、夕顔、十五」なになはみわたせ奉るなりつるを「同、末摘、七」
みきはたれともみわたせ給はる「同、玉葉、廿」おほくのてしてしたるあはは
かきく…みわたせなりけり「同、幻、廿二」それともみわたせ給はるなりお
つる御をみたの

「宇津保、嵯峨院、八十八」わか子の身がはりに我こそしなめ
とふしむるひ給ふ身のかはり「源、深舟、六十三」そのか人もはじ
めのもつにはあまきしなみのかはりなむとらひつ、あまきしなむのみま
めすれば夜行なしたるぬらぬらなること「同、歸輪、六十一」たしたてけいさ
るんを御身のかはりに出したるをせ給はる御使なり

「萬、一、廿六」をみわたせはせらる「兼輔集、井でと
つらみかかはせらるにたせ

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

「寛方集」みかは水のつらにむてなむむらにめる蔵人の
みわた…みかは

みかほ…みかほ

みかほ…みかほ

二百七十四

ものおもひかほに…たかかほといは「古卷下」東宮雅院にて…
この花のみかほは水にちりてなげれるをみてよめる
みかほの池 「齋宮女御集」宮の御まへのより水をみかほの池をな
しつゝなほ

みかほす 「伊勢物語、九十五段」をんなのつかうまつるをつねにみかほし
てよほひわたりけり 〇大鏡、庄、翁たりみかほしてあざむらふ

みかほ 御顔「拾、哀傷」かひはらばらばらにけりしひありて文珠
のみかほめひみづるかな

みかほし 欲見。萬葉に多し。「記傳」卅六、卅五丁に皆出「萬
十九、十六」しらたまの見かほし君を見ずひまに「萬、十七、卅四、長歌」
山から見かほしから

みかほしらなむ 「是則集」猿かひになくおなし「大井川ナリ」行幸に
「秋山のかひにみかほしなりなく聲をよめかへて袖ぞぬれぬる」興風
集二七出

見かへる 「源、若菜、上、百二」猫のいたなははみかへり給ふるも
もろもろなしたるもろもろのちかへて「同、紅葉賀、廿二」かほはりのまなら
し給ふるもろもろのちかへてみかへりたるもろもろ

見かへし 「宇治拾、一、廿七」はなみかへし〜てよほひわたりけり
り

みかほ 「古、卷上」仁和のみかほのみにほはしける時に云々「源、神、
十六」御門のむらりもろもろなしたるもろもろ馬車「同、須磨、四十三」

のよの池のこぼりのさやけきは月の光のみかへりけり「源、初音、初」
庭よりほはしつゝみかへるもろもろのちかへし給ふる御かたがたのありもろもろ
〇「源、若菜、五」はなみかへりけり心のかたに我身のけりもろもろ
くもあり「是は化粧するを今もみかへるもろもろのちかへて」拾、神樂、能宣「
」みかへるもろもろのちかへて山〜もろもろのちかへて天の
「新古今、俊成」雪をればは嶺のまろもろのちかへて月にみかへる天の
かへ山

よめるを基俊の難したるも余材抄戀二に見ゆ〇伊勢にくだり
て侍りける比顯季卿のもとに遣しける」とながしな玉くしの葉に
みかへれてもろもろの草々めちなすもろもろ〇信友按、みかへれては身
隠れて也こは俊頼卿齋宮内侍に相具して伊勢に下りてあるほ
この歌也延喜式月次祭祝詞に大中臣太玉申附隠侍天云々
稱申事乎、神嘗祭にも大中臣太玉申附隠侍天云々とある詞を
おもひよて興してよみ玉なる也 〇「散木」ゆきわれはあはほの山
もみかへれてもろもろの名をよめはほはほはほ「月清、上」かかきまに
おももろもろはみかへれて、かよはかりの鶏の下みち「千千、戀一、爲
相」をよてらぬにほの下道みかへれて通も心のありなすもろもろ「同、
同、法皇御製」池水のそこの玉のみかへれてもろもろのちかへてたれはよ
す

みかへれ 水隠「新古今戀五、詠人不知」あふもろのちかへて下草みか
へれてしつゝもろもろのちかへるもろもろのちかへて「大鏡、上」ねたて、よほは
わらわらもろもろの我みかへてに飛もろもろのちかへて「同、三、五」みかへるも
ろもろのちかへるもろもろのちかへて水かへてしつゝもろもろのちかへて「同、五、上」
「萬、十一」みかへるもろもろのちかへて水かへてしつゝもろもろのちかへて「萬、
」みかへるもろもろのちかへて「和泉式部集、上」山かへてみかへるもろもろ
ひさし妹かへるもろもろのちかへて「和泉式部集、上」山かへてみかへるもろもろ
おももろもろのちかへて人かへてしつゝもろもろのちかへて「古戀二、友則」川のせ
になは〜玉のみかへて人かへてしつゝもろもろのちかへて「後拾、戀二」
恋「二」わが戀はほはほはほのちかへてのちかへてのちかへてのちかへてのちかへて
かかへるもろもろのちかへて「山陰でつゝる山田のみかへてしつゝもろもろのちかへて
〜もろもろのちかへて」此歌新勅に朝恒とてわら田のみかへてしつゝもろもろのちかへて
身かへてしつゝもろもろのちかへて「後拾、卷下、真道」みかへてしつゝもろもろのちかへて
身かへてしつゝもろもろのちかへて「後拾、卷下、真道」みかへてしつゝもろもろのちかへて
みかへてしつゝもろもろのちかへて

みかへれ 「源、玉菖、八」みかへてはありとらわれはみかへてしつゝもろもろのちかへて
らとら「源、松風、廿五」文はひろくならなれど女まみ給はゆる
なるをせめてみかへし給ふ御まじりこそわらひしつゝもろもろのちかへて「同、女
十六」みかへてしつゝもろもろのちかへてしつゝもろもろのちかへてしつゝもろもろのちかへて

みかへれ 水身カケタルモ 〇俊頼の玉くしのはみかへれてしつゝもろもろのちかへて

みかへ 「源、玉菖、八」みかへてはありとらわれはみかへてしつゝもろもろのちかへて
らとら「源、松風、廿五」文はひろくならなれど女まみ給はゆる
なるをせめてみかへし給ふ御まじりこそわらひしつゝもろもろのちかへて「同、女
十六」みかへてしつゝもろもろのちかへてしつゝもろもろのちかへてしつゝもろもろのちかへて

みかへ

みかへ

二百七十五

みちかひ 龍馬、高也... 玉柳(源業)

みちかじ 龍、舞、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿... 眞影をたしつ...

みちかじ 龍、舞、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿...

みちかひ 龍、廿... 候其本を紙...

みちかひ 龍、廿... 眞影をたしつ...

合「源」六、四十二「後の世の御みづをばみづとておぼへてみづと
てりて」[五、三、三、深蓬]「みづつはほのかれはるまむかたみみる
ものうちにはるまむかたみみる」[源、若菜、下、七十二]「かくも給ひにけり

いと事世中のみち御みづをばみづとてみみる」[同、夕顔、
五]「御袖のほほはるまむかたみみる」[同、四十二]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
ひてはるまむかたみみる」[古、三、一、讀人不知]「わが戀はほほ
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[千載、神祇、重保]
「同、雜上、後醍醐」「みづはほのかれはるまむかたみみる」[浪とす風のちか
る日ぞみづをばみづとてみみる」[四十五]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同、四]「松原はみづのまみづをばみみる」[六、
下]「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

面のさなへ水すみてにじりなき世のかけをみてる」[玉
葉、卷下、入道前太政大臣]「咲みてる花のかわりの夕附日かすみてし
つはほの遠山」

●みづはかり 雑繩「和名、十五、五」漢語抄云雑繩美豆波加利

みづはよつば 「後、四、中、卅六」みづはよつばはほのかれはるまむかたみみる殿
つりの御みづをばみづとてみみる」[源、早蕨、十六]「めもか
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

●みづはくも 「夫、廿、卅、保」[かき山の谷のみたらしむすまはみづは

くもみづをばみづとてみみる」[後、三、三]「月かけのうかよる水はくもみづは
はれはくもみづをばみづとてみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
ら所にすみ侍けるは太武與範朝臣のまかりわたるついでに水た
るはくもみづをばみづとてみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

●みづは 水上に園に浮く泡なり」[萬、廿、五十二]「美都煩なむわれ
なみづは

みづは

みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」
「みづはほのかれはるまむかたみみる」[同]「みづはほのかれはるまむかたみみる」

●みづは 水上に園に浮く泡なり」[萬、廿、五十二]「美都煩なむわれ
なみづは

みづは

神代「新後編、秋、下、右大臣」「神代」の影をみづの
 の古野の宮の月の「後後編、春上、鎌倉右大臣」「朝儀にて
 を見れば水のたのしみのふるに春は來にけり〇賀茂翁云、後世
 みづのたのしみの宮、何れもみづの宮なり此公の誤
 りを傳へてみづ給ひて公の歌のむらもせしは古の例
 たり給ふもみづ給ひて公の古事記なり此方の例
 ならむ

水鏡「千載、釋教公任」「千載」にてみづの水の泡の
 世に身を有けり「千載、釋教公任」「千載」にてみづの水の泡の
 龍田川峯の秋もみづの
 「龍田川峯の秋もみづの」
 「秋もみづの」
 「同、冬、公維」「秋もみづの」
 「新編古、
 生田川水の秋もみづの」
 「新編古、
 生田川水の秋もみづの」

三の道「米、廿、一」「三の道」の道
 「米、廿、一」「三の道」の道
 「米、廿、一」「三の道」の道

米、廿、一、後、京師「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

米、廿、一、後、京師「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

同、五、藤原「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの

同、五、藤原「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの

同、五、藤原「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの

同、五、藤原「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの

同、五、藤原「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの

同、五、藤原「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの
 「同、五、藤原」の影をみづの

「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」
 「米、廿、一、後、京師」

けずり「拾、雜書」みづいづらみづらみづらひけるは○みづい所朝夕の

人御膳を供す別當預所兼等あり

あさひびきのうら「嵐次、遊録」うらみたれかすめるそらにあそぶ

はらたまのきは瀬の水をひかはや「後、西條、菅原右大臣」「水引の

白糸はうせはなほたはの衣にたちやかすねん

あさひもるまじ「采、鳥邊野」「御なかひひいづ水もるまじげな

たは

あさひもしきあさひ 一年三百六十日「相百、陸源」「みつも、ちむ

ささづかむる此夜は、思ふはてのつゝもる也けり

あさひせ「後、旅、伊勢「伊勢集」「水もせぞうさめる時はしがらみの

あさひのこころもみえぬみちがは「すさありける」)

あさひせかほ 三途川をらぶ「騎船日記下下」みつせ川をらぶのほ

あさひつせ川わたるみるみちがかりのひらば「衣、あさひかへん」源、

あさひ三上「三瀬川わたるみるみちがかりのひらば「衣、あさひかへん」源、

あさひ「三上」うき人の中よりいづる忘水末やみつせの川を渡

るは「萬代、懸三、西行」ものおもも涙もよめてみつせ川人をしづむる

あさひすも 黄河「開花、雜下、好世」水上のたためてければみか代

はらたひひするほり川の水「元輔集」わかさつむ子日のまづの干

がたたるさかかをの題で「源、性」もみちのはなわかれてもるみち

あさひは紅ふかき浪をたつて「齊明紀、三」瀬の千之夜の矩娜

利らなたり千之原もくれに飲岐底かゆかん「武烈紀、二」之褒世

能「三」一本以ニ之褒世「馬、瀬雄斗」源也

あさひのあさひ 「新古今下、寂蓮」「くれてゆく春のみなどはし

あさひあさひあさひあさひあさひの舟「美濃家書」春のみなどは春の

あさひあさひあさひ

あさひあさひ 「萬、十二、十七」「濤人のあし分をぬきおほいおほみ

あさひあさひあさひあさひあさひ「新後、冬、後九條内大臣」朝霜のくれ

あさひあさひあさひあさひあさひ「新葉、春上」み

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

あさひあさひあさひあさひあさひ「萬、

代のかげすみつ、みせよしら川のみつ「しら川の玉藻はこよひむす

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

あなはつちとせにすまむ光しるしも「新後、賀、入道前太政大臣」「水上

草はみなれ... 源 後、讀人不知「みなれみなれのさかひなくなみた川ら...」

みなれ

源 後、讀人不知「みなれみなれのさかひなくなみた川ら...」

みなれ

見馴 源、水、十、八「みなれみなれのさかひなくなみた川ら...」

見、上「草葉も春は見なれけり...」

みなれがほ

「千載、夏、季通」むかしわがあつしもの思ひ出てみ

みなれがなれ

「源、松風、七」あはれなるかたらひにたにみなれさな

みなれいとも

「源、蓬生、十五」かたみにそ、給ふときみなれ衣もし

みなれをさ

「拾、離、一、讀人不知」おほむ河くだす夜の水馴極みな

みなれはせ

「源、蓬生、十九」みなれはすなりける女にぞし狐なぞ

みなれは

「源、蓬生、十九」みなれはすなりける女にぞし狐なぞ

みなれは

「源、蓬生、十九」みなれはすなりける女にぞし狐なぞ

みなれは

「源、蓬生、十九」みなれはすなりける女にぞし狐なぞ

みなれは

「源、蓬生、十九」みなれはすなりける女にぞし狐なぞ

見なれ

「源、朝顔、廿一」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「夫、廿三、後編」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「水、占、廿七、五十五」妹にあはす久しくなりぬにぎ

みなれ

「伊、集、廿七」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「田、水、廿七」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「新、六、三、後行案」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「前、漢書」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「源、明紀」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「源、明紀」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「源、明紀」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

みなれ

「源、明紀」みなれみなれのさかひなくなみた川ら...

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「同、御幸、五、廿六」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

見おぼせ 「源、若菜、下、八十四」かの人心の心を、見おぼせてたまひつ

テ尼ノ地ニツカハレントコソ世ニテハノモチカケル候ニテモ
ちひかしつひつひつひつひつ候なり云々
ひしてまめにして「みやじかノ人」源、紅葉集、廿一「しほる宮
かノ人おほかるころなり」源、紅葉集、廿一「しほる宮
おしなるのうの宮」かノし給ふ云々

みやじかみ 「源、神、四十四」宮のちのちのちのち人目まれば宮
みやじか 「拾、雑、春」南殿にちりつみて侍りける花をみや」

みやじか 「拾、雑、春」南殿にちりつみて侍りける花をみや」

みやじか 名香 「源、神、四十四」宮のちのちのち人目まれば宮

みやじか 明年 「源、神、四十四」宮のちのちのち人目まれば宮

みやじか 名香 「源、神、四十四」宮のちのちのち人目まれば宮

みやじか 名香 「源、神、四十四」宮のちのちのち人目まれば宮
みやじか 名香 「源、神、四十四」宮のちのちのち人目まれば宮
みやじか 名香 「源、神、四十四」宮のちのちのち人目まれば宮

にておほしき世は御めしうの内侍のすけの覺を年月こそてた
權の北方にて世の中の人のみやまを宮つかさめし折はた
この局に集る「宇治拾、十一、六」御弟子になりて候はんとひて
ふらふらより名簿ひきいて、せしめけり「同、十一、九」たちまちに
みやまをかきてみやまにみやまをみやまにみやまをみやまに
みやまをみやまをみやまをみやまにみやまをみやまにみやまを
みやまをみやまをみやまをみやまにみやまをみやまにみやまを
みやまをみやまをみやまをみやまにみやまをみやまにみやまを
みやまをみやまをみやまをみやまにみやまをみやまにみやまを
みやまをみやまをみやまをみやまにみやまをみやまにみやまを

みやま 眞山、深山。此論記傳四十二、二十五丁にあり「古、秋下、
風」深山よりおちる水のゆるみて秋は限とおもひしりぬる
「拾、上」みやまの松はみやまの松はみやまの松はみやまの松は

みやまの里 「新古、春下、伊弉」月詠、三「みやまの花ゆる
道ゆる」月詠、三「みやまの花ゆる」

みやまの里 「新古、春下、伊弉」月詠、三「みやまの花ゆる
道ゆる」月詠、三「みやまの花ゆる」

みやまの里 「新古、春下、伊弉」月詠、三「みやまの花ゆる
道ゆる」月詠、三「みやまの花ゆる」

みやまの里 「新古、春下、伊弉」月詠、三「みやまの花ゆる
道ゆる」月詠、三「みやまの花ゆる」

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

みやまがくれ 「古、雜、上、けんけい法師」かたちこそ深山がくれの朽

成季のあひはられて侍りひものなをせし高の出やほせ侍も所せく覺なきし、しほのひなるにありて小田河美作茂平がももちてかほせ侍りを建長六年十二月廿日節分の御かたたかのために前相國の宮小路の亭に行幸なりて次日一日御逗留ありし相國も息をめて御覽にさなられけり返してつかはすとて少將内侍紅のさすまをにうたを言ひ鳥につけて侍ける「春にあふ心は花のみささかろのけけ御代のこころをほまほまじも又女房にかはりて檀紙をかきおなじくむすひつける」すまた川すまじしみる鳥はほは雲の上に見るかな此事を兼直宿禰したまひて本主に申こひて見侍て返すとて都鳥芳名昔聞萬里之跡微禽奇體今遂一見之望畏悦之餘謹述二心緒二而已前二河守下都兼直上にはりなる御代にのみみすみみ川にみける鳥の名をたつねう、

みやび 「源、若葉、十九」「みよ人にゆきてかたらん山櫻かぜよりのみよびの見るぞく」(並)都人に也

みやび 宮司の心 (源、若葉、十九) 都のつらに何をせんと思はにかしこにみよのなかるとし〇都より田舎へちよひつゝ也

みやび 「源、若葉、十九」「みよ人にゆきてかたらん山櫻かぜよりのみよびの見るぞく」(並)都人に也

みやび 宮人 (萬、十八、七) 「おせのちをゆきてしみてはも、しきの大宮人にかたりつぎせん

みやび 「源、若葉、十九」「みよ人にゆきてかたらん山櫻かぜよりのみよびの見るぞく」(並)都人に也

みやび 宮司の心 (源、若葉、十九) 都のつらに何をせんと思はにかしこにみよのなかるとし〇都より田舎へちよひつゝ也

みやび 「源、若葉、十九」「みよ人にゆきてかたらん山櫻かぜよりのみよびの見るぞく」(並)都人に也

みやび 宮人 (萬、十八、七) 「おせのちをゆきてしみてはも、しきの大宮人にかたりつぎせん

みやび…みやび

ふれば都のてかりかけの目やなる「顯輔集」「うきはは都のてかりあまはてむひながるそはたあひまなな「萬、五、廿六」「あまはるるはなほつをせすまひつ、都のてかりわするをにけり」長門、平家、九、十」都のてかりなりなすらたらたまりてたりひなびたるもの、ちたこをらす「夫、十四、舞臺」「けははまたしてら山路のさへの花みちのておりつして見る」四季物、四月「心して都のてかりにはかうらひつへいなるほしたなるなまこなり」千載、離別、公實「かこりこほほほ定めわかれちほまこのてかりおもひでにせ

みやび 「夫、廿六、長家」「朝のてかりるさもみちなかりせはななるまじもみちこ心や

みやび 宮木 (古、墨、其之) 柚人は宮木ひくらし足引の山のやまひよよひちよひなり

みやび 宮木守 (拾、雜、上人丸「萬、十三」「ひなみちあぢみの宮は名のてみてかすまたなまき宮木もりなり

みやび 「夫、廿三、信實」「ひたち帯のどけよと祈る宮めりまづゆきあひのちきりかもせん

みやび 「源、東風、八」おれをひしう事打合ぬみよびこのめる人のはてくは物ぎやうもなく伊勢物、春日段」昔人はかくらちはもみやびをなんしける「萬、五十九」「梅花夢にかたらくみよびたる花をあれも酒につかてこそ」源、若葉、下、九十五」内わたりなごのみよびを

みやび 御息所。女御更衣の御子を産み給へるをみやす所は申す也(源、桐葉、六)ここの夏みやす所はかなき心ちわつらひて「古、春上」二條の後のもう宮のみやす所をきこをける時

みやび 「枕、三、十五」ほそをのに人ともまたたてありんものこもみやすからず

見まはす 「源、若木、五十一」「いとつかに見まはるる」(同、神、四十四)いづもの哀れなるけし打見まはし給ひてとみに物もの給はす

みま 御前 (古、神、そのの歌)「神垣のみむろの山の榊葉は神のみまに」しげりあひにけり「拾、哀、後」靈山の釋迦のみまににさきりして真如くちせすあひみつる哉

みま 「古、釋、北」ゆく雁を鳴なる云々此歌云々はある人男女もるどもに人の國へまかりけり男まかりたりてすなはちみまかりにければ云々

みま かりて「伊勢物、百一」おほほほとての榮花のかりにみまをかりて藤氏のこころをわづらひしよめるをなげらひける(「世、まじくしてさうと詞なり」(同、七十七段)昔田村のみまかり、申みまかりおはしましけりその時の女御たかきことを申みまをかりけり

みやび…みま

介とつけたり云々(此前常陸介といふ歌をうたと故也)「源、竹川、六」心にくま女のおはする所なれば若き男の心づかひせぬなう見えし

見あしりれぬ 「源、東風、九」かゝる御文などとりつたへはじめけ

みあし 「和泉式部集」「いりのひるひる心のはちちみづなりのをては今ぞもみびみたる」

見あした 「宇治拾、十一、十二」殿上人をいひのきて見てことと

見あはせ 「源、玉葛、卅」幸のあはれをいひはなしてあはせむ

見あはせ奉り給はず 「源、葵、五十」女君は云々、みあはせ奉り給はず

見あはす 「源、葵、五十」女君は云々、みあはせ奉り給はず

みあはす 「源、葵、五十」女君は云々、みあはせ奉り給はず

みそめて御あへたむくる春は來にけり

みあかし 「源、夕顔、卅八」みあかしのかけほのかにすきみゆ「宇津保、藤原君、十九」土をまろがして是を佛といは、御あかし奉り神といは

みあかしふみ 「源、玉葛、廿四」みあかし文などをかきたる心はな

みあれ 「源、藤原集、十四」たの上御あれにまうて給ふとて「(細)御

おりたまひてのち祭の御あれの日人の姿を奉り侍けるにかまつけられて侍ける歌云々「萬代、神祇、侍従内侍」

見あつかひ 「源、夕顔、六」物ノ々いとおそろしきまで物し給ふありしを見あつかひ侍りしほほは「宇津保、たづの村鳥、一」

見あつめ 「源、宵木、四十四」くまなく見あつめたる人のいひしことは

見あはす 「源、空蝉、八」やうく見あはし給て「同、夕顔、四十四」

見あは 「源、葵、九」手をつくりて顔にめて、見奉りあけたるも

みあしたまへ 「宇治拾、一、卅」またかたはらに人のほたらけはた

みあはす 「源、葵、五十」女君は云々、みあはせ奉り給はず

みあはす 「源、葵、五十」女君は云々、みあはせ奉り給はず

みゆき 池のほとりには松風は...

みゆき 柳 徒然六十六段...

みゆき 近世の歌よみは庭のこもりの...

みゆき 拜舞以て雨不立三庭中...

みゆき 袖をれし花桶や...

みゆき 見聞 源、源、源...

見ゆ 源、源、源...

見ゆ 源、源、源...

みゆき 是は男女のこもりの...

みゆき 御湯 此山やみちの...

見ゆるす 源、末摘、十八...

見ゆ 源、源、源...

みゆき 御幸 院にのこカウカ...

みゆき 耳 夫、廿二、和泉式部...

みゆき 行幸 狭、四下、廿八...

みゆき 古、冬、融入不知...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 源、源、源...

みゆき 是は男女のこもりの...

みゆき 御湯 此山やみちの...

見ゆるす 源、末摘、十八...

見ゆ 源、源、源...

みゆき 御幸 院にのこカウカ...

みゆき 耳 夫、廿二、和泉式部...

みみたれ 「拾玉十七」... 此年... 身はみみたれてみみる... 人はのちおひのつ... 「耳たれをてしる身ももも角も草も後の世のため」和名三十四「耳美々多利風熱生耳膿汁也」

耳たつる 「源隆生廿五」... 御すもみてもおしなるとのつねの人をば目もめ耳たてたまはず「同、若菜、上、四十三」ひびくは

耳たつて 「秋、二、三」... 暁まで門たつて音もせずあつては耳たつては

みみづへ 「新六、六、か」... 山風... 葉がしはもたか

みみしづ 「後、一、十、八」... 此ののほはらみ

耳おれ 「源、横柱、七」... 身のかかりかへし

耳おれ 「源、横柱、七」... 身のかかりかへし

耳たれ給はぬ手な... 「源、一、上、八」...

耳おらせ給はず 「秋、一、上、八」... 琴節我も心に心をいめて人にみなるせ給はず...

みみ草 「秋、七」... 七日のわかさを人の六日に...

耳なし山 「後、戀六、讀人不知」... 山の野はみなし山かよふ鳥よ

みみらしのしま 「新六、上、上」... 借るのねづつのひまに物語する

みみしづへ 「新六、六、か」... 山風... 葉がしはもたか

みみしづ 「後、一、十、八」... 此ののほはらみ

耳おれ 「源、横柱、七」... 身のかかりかへし

耳おれ 「源、横柱、七」... 身のかかりかへし

みみづへ 「新六、六、か」... 山風... 葉がしはもたか

みみしづ 「後、一、十、八」... 此ののほはらみ

耳おらたつる 「宇津保、吹上、十六」... 松風のほほひびきたのどかな

みみ草 「源、常夏、廿四」... 此のなみのさななをよものごとくかた

耳ひらひ 「源、宿木、五十八」... 此めしよせたる人のきかんとつまれば

かたはらいたる筋のこをこそそそりてむれ昔より聞ゆるまななを

耳あざみ 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あじか 源、若菜、十四「のちかたみしのはなよりほかにまことあ
まのこゝろ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

あしねつ 夫、十一、備前正公朝「から崎の松吹風をみなし
なびなをみればあしねつ」

和物、一「身ひらひのあまひをいふはなつともあまひのあまひなり」

あまひし…あまひ

「後」あまひし

あまひし…あまひ

「後」あまひし

あまひし…あまひ

「後」あまひし

「後」あまひし

あまひし…あまひ

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あまひし

「後」あせ

あせ…あす

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

「後」あせ

あせ…あす

あせ…あす

あせ…あす

あせ…あす

あせ…あす

あせ…あす

あせ…あす

あせ…あす

「伊勢物語、八十三段、惟喬のみ、例のかりしにばはしむるは、云々」
 「古事記」に「なほて身の内たゞは老ぬらん年のおもはん
 こころをばらして」
 「源、帚木、十五」げんかうもしつゝかりけりと
 云々「同、野分、三」御、さるるをばらして給ふるは、
 「源、藤原、五」おぼつよのまうりてをばらして給ふるは、
 「同、藤原、十」
 五「おぼつよのかへして給ふる事さうか、は、おぼつよのかへして
 廿六「おぼつよのかへして給ふる事さうか、は、おぼつよのかへして
 給ふる」
 「同、蓬生、七」今のよの人のすめる程うちよみおこなひな
 ら事にはつわしてしまひて、
 「同、葵、十四」御、さるるをばらして給ふるは、
 おぼつよのかへして給ふる事さうか、は、おぼつよのかへして
 して秋のうは風もた、な、おぼつよのかへして給ふるは、
 りあはれなるべつがた「同、帚木、四」は、おぼつよのかへして給ふるは、
 こころをばらして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 し、
 「後、別、讀人不知」そつてゆる扇の風し、ゆるあはわ
 が思ふ人の手をなはなれそ「枕、五、七」つゆをばらして草こそつ
 れなはれおぼつよのかへして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 おぼつよのかへして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 たこころをばらして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 るにほひけりかたえかれは、おぼつよのかへして給ふるは、
 年のはじめのかりしは、おぼつよのかへして給ふるは、
 「古事記」君が

よそひしたるをありけり
 「伊勢大輔集」かた戀のくるしかりし
 もなをめて命しあらは、おぼつよのかへして給ふるは、
 はのいろをてそつてなかるれば、おぼつよのかへして給ふるは、
 後西園寺入道前太政大臣「けふしは、おぼつよのかへして給ふるは、
 みかけてあまをたつす」
 補 過去の「月清、五」つゆをばらして給ふるは、
 露もや花におくらん「同、同」朽にける森の落葉に霜きそつてかはり
 し色のまたかはりぬる「後、春下、兼輔」いろふかくほひしことは藤
 浪のたちもかへて君をばらして給ふるは、
 つはなをめのいろふかくおぼつよのかへして給ふるは、
 「よ、おぼつよのかへして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 清、三」おぼつよのかへして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 なる、見し「梅園日記」云、建久六年民部卿家歌合廿一
 番左 沙彌性照、山花歌「さくら花ちりそめしまで見しほは、
 に成る志賀の山越の判詞云みるほは、おぼつよのかへして給ふるは、
 ては少こたがへるにも。慎言按には作者のよめりしまつて見
 し、おぼつよのかへして給ふるは、おぼつよのかへして給ふるは、
 世にも似たるかへておぼつよのかへして給ふるは、
 句題和歌に喚歸多是看「花回」今はは、おぼつよのかへして給ふるは、
 なりし花をみしまに程ぞへける詞花集關白前太政大臣牡丹
 を「咲しよりちりはつるまで見し程に花のもてはつかにけり

後拾遺集赤染衛門「さつてゆる扇の風し、ゆるあはわ
 まての月を見しかたは、おぼつよのかへして給ふるは、
 の判詞は、おぼつよのかへして給ふるは、
 が、おぼつよのかへして給ふるは、
 御歌は、おぼつよのかへして給ふるは、
 補 往「月清、三」おぼつよのかへして給ふるは、
 おぼつよのかへして給ふるは、
 雪まの、おぼつよのかへして給ふるは、
 とお人も今はあらしの風をわびし「同、同」おぼつよのかへして給ふるは、
 風は、おぼつよのかへして給ふるは、
 れたは、おぼつよのかへして給ふるは、
 上心、おぼつよのかへして給ふるは、
 「立出つ木こりしたかた岡のかへして給ふるは、
 雜三、季吉「跡たきて住りかたは、おぼつよのかへして給ふるは、
 にせん「同、春下、讀人不知」おぼつよのかへして給ふるは、
 らおぼつよのかへして給ふるは、
 の色を日吉のかげにうつして見る「新後撰、春上、後草紙」
 まてし日より山里の雪まの草まの、おぼつよのかへして給ふるは、
 は山澤水のうす氷とけして日よりわかたつみつ、「同、春下、新院御
 製」九重にははなれは、おぼつよのかへして給ふるは、

冬道古「今朝はまたそつてゆる扇の風し、ゆるあはわ
 れら「後拾遺集、赤染衛門」おぼつよのかへして給ふるは、
 るかへては、おぼつよのかへして給ふるは、
 思ふつた、おぼつよのかへして給ふるは、
 なは、おぼつよのかへして給ふるは、
 下「かへてみし末もたは、おぼつよのかへして給ふるは、
 「新千、盛賀、長家」すたは、おぼつよのかへして給ふるは、
 へ、おぼつよのかへして給ふるは、
 おのころ、おぼつよのかへして給ふるは、
 に、おぼつよのかへして給ふるは、
 りは、おぼつよのかへして給ふるは、
 を、おぼつよのかへして給ふるは、
 りに、おぼつよのかへして給ふるは、
 院「よそひしたるをありけり」
 染集「云々、京、かへして給ふるは、
 「風雅、讀人不知」かへして給ふるは、
 る花を、おぼつよのかへして給ふるは、
 みち、おぼつよのかへして給ふるは、
 ま、おぼつよのかへして給ふるは、
 かるる櫻花かへて、おぼつよのかへして給ふるは、
 は、おぼつよのかへして給ふるは、

會...手...
若菜上、六十入、其...
給ひ...
給ひ...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

水...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

ひ...
舞...
【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

【補】...
【補】...
【補】...

「同、手齊、廿三」の、かして打しほは...
「同、四十二」あはれは...
人は、かするもの、しほは...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

しほふかきさき 「源、朝顔、二」...
しほふかきさき 「源、朝顔、二」...

れを猶いとうしめたて 「源、未摘、十二」...
「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

「同、四十二」あはれは...
「同、四十二」あはれは...

しほ 死 「拾、哀傷」...
「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

約る志奴留は過去る也...
「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

「同、廿一」此殿の御しほ...
「同、廿一」此殿の御しほ...

道前太政大臣「しりほかりし百夜の数は」
 のはしりほ「同、同、為名」「しりほのりのかすのり見ま、かたてしりほのり
 ようめれるしりほのりしりほ「新後拾、戀三、前僧正弘賢」「小車のしりほの
 はしりほのりかたてしりほのり上の敷をすて待ま「檀古戀三、法印覺寛」
 ・「百夜まもはたつこま命かはかまははじめじしりほのりしりほ「續
 千、戀三、為世」「かたてしりほのりしりほのりまたれけん百夜も過ぬし
 ずのはしりほ「萬代戀三、光顯」「しりほを君しりほのりしりほのりそち
 また九夜にこよひなるをば「同、同、法印信忠」「百夜を待まはは
 のりしりほは思ははかたてしりほのりしりほ

しりほ 七夜「源、柏木、十一」七夜は内よりそれもおほけけまな

しりほ 仕丁「神祇式」春日神四座祭、云々仕丁二人常陸國

しりほ 使廳「徒然、百六十三段」此法師をすて所より使廳

しりほ 尻「源、空蟬、十二」小君御車のしりほにて一條院におはし

しりほ 尻「源、空蟬、十二」小君御車のしりほにて一條院におはし

しりほ 尻「源、空蟬、十二」小君御車のしりほにて一條院におはし

しりほ 尻「源、空蟬、十二」小君御車のしりほにて一條院におはし

のりは云々これかせんちみんとてしりほにたてしりほに「枕、三、廿一」
 こまのりはははは尻にたてしりほのり牛カロー、
 れいものりまたなげなるは心うし「多武峯物語」兄君のなり出給はん
 しりほにたてありけんことを思ひしか「宇治拾、六、十四」人々し
 りにたててをがみのりしりほ「同、六、廿二」そのしりほにたてて二百人の
 つはものみたれ入て「同、八、十四」この信のりかむところを見んとてし
 りにたててゆく「伊勢物、廿四段」女のりかなしくしりほにたておひ
 ゆけおおひつかで

しりほ 尻「源、梅枝、廿」すくせのひくかたにやほくしりほにありあ

しりほ 尻「源、梅枝、廿」すくせのひくかたにやほくしりほにありあ

しりほ 尻「源、梅枝、廿」すくせのひくかたにやほくしりほにありあ

しりほ 尻「源、梅枝、廿」すくせのひくかたにやほくしりほにありあ

しりほ 尻「源、梅枝、廿」すくせのひくかたにやほくしりほにありあ

しりほ 尻「源、梅枝、廿」すくせのひくかたにやほくしりほにありあ

しりほ

しりほ 「平家物語、五、廿二」かに聖の御坊はしりほをもち給はぬ
 か「枕、十二、廿」つぎ人のしりほをばらうたくおほまて「源に
 頼ち人の知人なり」

しりほ 後言。カケトなり「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ 「源、少女、廿一」あなむくつけやしり

しりほ

しりほ 「新六、五、内大臣」今はしりほをてしりほらん尻帽のり
 心におもひけしりほ「夫、廿七、公卿」もの、あつちしりほの虎の
 をはこの國にすまはははは

しりほ 前後なり「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

しりほ 「宇治拾、十三、六」やうく日もくれがたになり

きまにの給ひつけたりければ「秋、二九」わがしる人にてあるほどはちやみし女のことほめいひ出しなすも過てほごにけれどなほにんし「同、三、廿」しる人のなりのにはちやむねつおるらんかし「仲文集、卅」ものめをらんごとなき物にはおもひながらまたしる人多かりけるにちやむねはしにまて物たりなごして云々

しるす 記「千載、雜下、短歌、宗廟」みそもじあまりひごもじは出雲のみちの八雲よりおこりけることしるすなる「源、若菜、上、百四」何ごも人にとこなるけちめをはしするしつたふまきなり「後拾、前書」太神宮のまけて侍ける事しるしに伊勢國に下りて侍けるに○しるすの所見合す

しるす 「類聚集、上、廿九」しるすせし柴はさ枝のつづもれかゝる山路の雪にまごひぬ「六帖、六、下」行かよままのほをみちのわかればしるすもみさでみはたゆらん「新古今、雜中、四行」しるすせでなほやまごかく分らぬ道の道ありも「同、春上、四行」よし野山ごのしるすの道かゝりまたみぬかたの花をたづねん「土御門院御集」まよふさ末のしるすはしらぬをけちやみむるこひのみちしは「大和物語」しるすしてゆくたびなれをかりそめのはれしねはか入りしもせじ「六帖」山の題のうた「しるすして行まし物をあひつ山ごのりまもまも道とてりせば「山家、上」さる雪にしるすし柴もらふもれもまも山ごにさるも「月詠、二、願家」花見んはまもまじけ山ごのりまも心なすしるすつづかな○滋臣云木の枝を

標折て道しるすとするに山深く分入て心を勞するをいひよせたり勞する事を骨を折るといふに同義か新撰六帖に骨ををるといふる歌二首見ゆ

しるす 「狭、三、中、十四」いもあつかはしげなりつる前裁の草ごもの雨にこちよけにうるほへるなかに大和撫子のしをれたるけしき中にもちうたげなるを「源、博、十五」お前の五葉の雪にしをれてした枝かれたるをみ給て「梨冲云、風の草木を吹しをる」といふもきはめていたましむるをいへは今もいたましむる心なり「後、雜四、伊勢」人こるあらしの風のまごければこのめもみさす枝をしるす「同、々、願十一」ねごめくおほし、なる、を「風雅、雜中、爲兼」岡のやまなひかぬ松は聲をなして下草しるす山おろしの風「玉葉、秋下、赤福門院」秋風はのきはの松をしるすよに月は雲をのどかにさゆく「萬代、夏、恒無」かへる道の道のしるすにみさぎの、花まつ秋をしるすてさゆく「月詠、戀中、重久」なでしこをわが戀草のゆかりとてなつさふ露に袖をしるす、こはしるすなるをし「新葉、冬、中院入道一品」「まごもくの山にや雪のつもるらんあなしのひはら風しなる也」續拾、秋下、後久我大政大臣「月にゆくほやまのりのかかり衣しるす、露に夜は更にけり「同、願旅、如願法師」むすれすはしをれていでし春雨のふるも人も袖ぬらすらん「續後拾、願旅、長明」旅衣たつ曉のわかれよりしをれしはてみさぎの、露「大和物語、三」しるすしてゆきたひなれをかりそめものちしねはか入りしもせじ「直解云、父の折

檻にめひてゆくと道の標折のこごにらびをしるす「古、秋下、康秀」

しるす 人を責ることも也「伊勢物語、六十五段」此女のいこの御息所

しるす 「源、若菜、上、百四」何ごも人にとこなるけちめをはしするしつたふまきなり「後拾、前書」太神宮のまけて侍ける事しるしに伊勢國に下りて侍けるに○しるすの所見合す

しるす 「類聚集、上、廿九」しるすせし柴はさ枝のつづもれかゝる山路の雪にまごひぬ「六帖、六、下」行かよままのほをみちのわかればしるすもみさでみはたゆらん「新古今、雜中、四行」しるすせでなほやまごかく分らぬ道の道ありも「同、春上、四行」よし野山ごのしるすの道かゝりまたみぬかたの花をたづねん「土御門院御集」まよふさ末のしるすはしらぬをけちやみむるこひのみちしは「大和物語」しるすしてゆくたびなれをかりそめのはれしねはか入りしもせじ「六帖」山の題のうた「しるすして行まし物をあひつ山ごのりまもまも道とてりせば「山家、上」さる雪にしるすし柴もらふもれもまも山ごにさるも「月詠、二、願家」花見んはまもまじけ山ごのりまも心なすしるすつづかな○滋臣云木の枝を

しるす 「夫、廿五、爲家」みまはなる慮のしをれはなごももごほり水にそれごもみまぬあしのしをれ葉

しるす 「檢垣姫集」四天王寺を題にて「老ぬればしはかくしてありぬをししわらしやまつ人にみゆれば「源、繪角、廿八」大方例の見奉るにしわのちるも、ちして「萬、五、九」くれなるのおもての上たいつくゆか斯和かきたかし「源、若菜、下、十六」尼君をばおなじくは老のな

みのしわのおはかりに人めかしくまらせんと「貫之集、上、廿九」菊のはなひちてなぐる、水にさる浪のしわなまごにさるける

しるす 「好忠集」老にけるよはひのち、しわものぶはかり菊のつゆにさるける「はるまはさつづる「萬、九、十九」わか、りし皮毛銀奴「古、長歌」浪のしわにちおほ、れ也

しるす 「源、紅葉集、十」けふらごご、なるなき人のしわなごも侍るかな十一「しるすはありてしつらひたりちまごのかみのしわなごなりけり「伊勢物語、五十八段」いみじのすまごの、しわなごをて「神代紀、上、廿二」所行「狭、四、下、四十九」海山波風のけしきよりはじめて女のしわなごもみさすかまじしたる筆のながれひびきあてみまふんは口をしるすをかしもあらはれぬを見し人に見せしはてみまふ

しわび 「宇治拾、十四、廿三」ほうけて物もおほさぬまごにありければしわびし法師にたりてけり「同、二、廿四」あまのにまごをちれてしわびて大なるくさるひの

しか 鹿「景行紀、十九、八」山、神令苦王、以化、白鹿、立、於、王前、二王、異、之、以、一、筒、蒜、彈、三白鹿、則中、眼而殺、之、
しか 然なり「源、末摘、十九」内よりかごの給へはしかまかり侍るま、なり「同、夕顔、四十五」中將のうれしはさる人やご、ひたまふしかをさ、しの春ごものし給へりし「續後拾、六、十七」今毛又志賀奈毛思行須「源、橋姫、廿六」しか御耳をさるはかりの手なごはら

くよりかこ…まほはつたほりこん」宇治拾、十二、十六融のおもひか
ほせ給へはしか候中「源、桐壺、十四」もしかなと 古、春
下、貫之「二輪山をしかもかくすか春霞人にしらね花をさくらん
「續千、神祇、後二條院」人よりはあはれとおもへ春日山しかもたのみ
をかくる年月「宇治拾、一、六」こはいかなりつることをせむ、はしかし
かをかたる

しが 「古事記、下、五」つまづはき斯賀如此波那能云、斯賀波
能 萬、十九、廿九、長歌「秋花之我色色爾見賜
しか 「源、草木、五」それしかあらじとそらにいかにはおしはかりおもひ
くたせん「同、夕顔、四十三」われはしかたつるこゝろもなかりき「古、
雜下、喜撰」わがいはは都のたつみしかをすむよをうち山を人はいふ
なり「續紀、廿四、七」別宮御座々半時自加得言也「大和物、五」
「われもしかなきを人にこひられし今こそまことに聲をのみきけ

しか こそをのほめてかなり「源、夕顔、三十五」めをばて待るものこの
五月のころほひよりおもむく侍りしかかしらりいひむらひ
なきて「同、四十五」人にもものおもふけしきをみえははつかしきもの
ばて給ひつれなくのみぞなして御らんせられ奉りたまふありしか
を語りらる「同、源、廿一」此過給ひて御こそあらまじりの
みもひひつてもみ給ひてか長きよのうれはしきもみ給ひ給
られん「同、紅葉賀、十三」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかは…しかり
かいらねたかりしかは「同、若菜、下、四十五」いであるまじき名をたち
て身のあはしくなりぬるなほきをいみじくもひしめ給へりしか
いとおほしく人にがらをおもひしも「同、上、八」おほきおほきあたり
に今はすみつかれたたりとなき年比心えぬまほき、しかいとおほし
かりしを「同、夕霧、四十三」念頃にのちのこをいとなみ給ひにし
かわかたなきまほいふ中にもうれしう見奉りし「同、松風、十七」を
なきこゝろにすこしはぢらひたりしかやうくうちをけて 枕、四、
卅一「かき捨よなきおほせを侍りしかと申せば「詞花、春、惟成」き
のうかもあられふりしかしがらきのとまよのかすみ春めきにけり「思見
集」春雨はふりそめにしかうつたへに山をみそりになるんと見し
「新撰撰、總六、道徳法師」こゝろわりとこひしきまほはおもひしかつら
にににもぬる、袖かな

しかばかり 「千載、戀五、定家」しかはかりちきりし中もかはりけり
この世に人をたのみけるかな「源、蜻蛉、四十七」しかはかりおほしなげ
く人のあまじしかはをらむ 後拾、表傳、重之「しかはかりちきりし
ものをわたり川かゝるほほははわするるとしやは
しかはおれ 拾、玉、三「いづより月はまぢりぬしかはあれか
げをみか、は玉のゐの水 古、春上、前太政大臣」もしよればよは
ひはおいぬしかはあれ花をしみれば物思もな
しかり 此「宇治拾、七、二」かへはらなちしかりて「枕、三、上、卅九」母
代もひつる袖をひかて云々もかきりかきけるけしきもほほほほほほ

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しかかへり 「新古、雜、秋、廿一」此御事のははるも過てか心もなほ
「同、草木、十」かかしてこゝろつらつらしていひしらるはほほたりし

しよらう 所勞「頼政集下、廿八」大事なる所勞ありて人してか、
せてつかはしける

しよち 所知「發心集」所知などまたある中に

しよらう 所領

しよらう 所得、證得「無名抄、下」披講のときをわかず、心々に
ものたりをし先達にもはらず、面々にしようとしてたけしきども
はなはだしけれ云々「同上」我人にゆるゆる、ほかにたりたりとも
しよらう「證得」して我はまごころしたる歌よみなまごころ云々「宇治拾、
十四、十一」きたりける水干をぬぎてこれにかへてんやといひければ
玉のぬしの男しようやくしたりとおもひけるにまごころとて舟さしは
なちていければ「前太平記」攝津守の宮にしかすいざや大勢を催
しかの宿所に亂入て所得せんといひければ云々、かれら不可敵所
得はきて置ぬ命を失ふもの多かるよしあはれしつるしようやくかな
云々「宇治拾、三、十」あはれしつるしようやくかな年頃不動尊の火え
んをあしくかきける也今みればかうこそまなけれと心さつるなりこ
れこそはしようやくよ「般若論」所得不得「智度論」一入三佛法寶
山「都無所得」法華經五百弟子受記也若少有「所得」候以爲
是

しよらう 承和「古大歌所」この歌は承和の御さのまひのくにのう
かたりける勝地ならんとみたり

た○仁明天皇の年號也

しよらう 證據「宇治拾、一、廿」何をせうとてかうはの給ふぞ

しよらう 承任法師「徒然、廿六」遍照寺の承任法師に
池の鳥を日ごろかひつけて「徒然、廿六」これは當社の承任法師に
て侍るが云々社頭にかかしまらせんとてまゐるなりと云々「古
事談、三」惠心僧都ノ承任法師奉花ノ間俄悶絶死去「源、楳
柱、廿七」かゝる折にもつごひ追従しよりてかしづき給ふまじいとめ
でたし

しよらう 叙位。正月五日人々の位を叙せらる、事なり「拾遺書」
正月叙位のころある所に人々まかりあひて云々

しよらう 所課「朝野群載、七」抑不_レ論_二權勢_一庄園_二可_レ勤如_レ
此所課之山依_二國司_一申請_一

しよらう 「著聞、十、廿一」そまゝく所望の事の候を申出さんとお
もふが

しよらう 所作「後、二、下、五十六」御堂の内しづくとしてのでかな
るに行ひの聲もあめおのくしよらうも打わすれつ、開入たるに云
云

しよらう 書寫「宇治拾、二、八」ひごりは反古の落りたるをひろ
ひ集めて紙にすきて經を書寫し奉る

しよらう 下「古、戀三、讀人不知」戀しくはしたにをおもふ紫のぬすりの
衣色に出なゆめ「朝恒集、上、廿八」古、戀三、朝恒「冬の池にすむに

ほろりのつれもなしたはかよはん人にしらすな、朝恒集下、廿九「う
はせ川したの心もしらすなはかよはん人のおもほゆるかな「朝恒集、
四十二」「玉葉、戀」「朝恒」「したはの心もえわたれもらうちは」を
「玉」にて我おもひをほけつ人もなし「素性集、二、二」夫、廿六、素性「敷
たの枕に」を、夫」たにもふか「夫」をこそ夢のたまひししたに
かよはめ「朝恒集、十九」したはのみななれまなれ「わたる」は冬川
の氷れる水も我となりけり「警言女御集、七」「九帖、六、上」八重な
らわたるみ「にみゆ」は山吹のしたにこそなけ井手のかはづ
は「源、常木、廿四」なまげなることを侍らんとしたにけくを聞たまひ
て「同、繪合、十七」おごりのしたにさすす、め給ふるもあらん「同、
須磨、廿」ありかたき御かへりみのしたなりつがな

しよらう 「萬、廿、廿六」「ひなごもりうすひのさかをこそ志太爾いもが
こひしつゝわらふさかを」同、十四、廿二「ほしほしとちかとのしらねにあ
ほ思太もあはの思太もなごこそなれ」同、廿、廿六「あがもとの
わすれも之太波つくはねぢかり見つゝ、いもはしめねね、十四、
廿」「人の子のかなしけ之太ははまごころありあなゆむこそまのをしけくも
なし○此詞みな時をいふこと、開ゆるよし大平いへり今も肥後
にて行しな歸しなごころいふしなは此思太の轉じたるなり

しよらう 次第「宇津保、勸聞、下、四十」佛名の所大徳たち次第して
ひまゐて七八人參るたらしうしてこそはむしたらしきも例の仲
忠行政仲頼云々「同、嵯峨院、六十八」東宮まゐり給ふたしたいし二

人事をおこなひつゝ、「同、樓の上、下、六十」やがて宮の御方の女房
事したのでたて、よすき事行ふ「榮、布引、三」次第にては皇太后
宮ならせたまふとし「枕、十、十一」車の次第もなまづく「我ガサ
ニナリ」のりらわがにけければ「後、二、下、八」九月朔日頭はほし
物のあるに中將君中納言になり給にけり大殿是をいまくし
げにおぼしたれをのみを次第のまゝにあかり給ふなるよし「鎌倉
右大臣集」老といふことを人々に仰てつかうまつらせし次によみ侍
し「さりともと思ふ物から目をてはしたいくによわる悲しき」源、
餘曲、十二「人々の御車したのまゝにひまごころはし」同、若菜、上、廿七
にしたらるもまたたぬてせしはしものこりもまゐるかきりあらは「枕、四
十三」紅のいろならぬまでかきくはかりぞ見ゆるしたに白まじ
す色なままたかたなりたる

しよらう 進退「源、楳柱、廿三」ち、おごりにはかななるを「しよらう
やうにをとおぼせざるなかりにさばかりの事をいひたまはけん云々
もまよりしたいならぬ人の御ことをなれはこそまごころ給ける（不進退
「細」孟）同

しよらう 次第司「新古、戀五」むかしみける人賀茂祭のしだいし
に出なちてなんまかりわたるといひて侍ければ○祭の次第を司り
て道の往來行列を定る人なるよし

しよらう 下葉「古、秋下、廿三」しらつゆもしくれもいたくもる山は下
葉のこらす色付にけり「式子内親王集」ほのかにもあはれば水におも

ひ草したるは...
【萬、十八、廿九】「あしり花ゆりもあはん

したる...
【萬、十八、廿九】「あしり花ゆりもあはん

したる 吉利。早口なり【萬、十一、下、十二】

したる...
【萬、十一、下、十二】

したる...
【萬、十一、下、十二】

したる...
【萬、十一、下、十二】

したる...
【萬、十一、下、十二】

したる...
【萬、十一、下、十二】

したる...
【萬、十一、下、十二】

いかなるに給ふ...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

したる...
【萬、九、七】

もひの色の下ぞめをせし

したつめた 「源、松風、廿五」いはひなげなる下つめたもまきらはばと

したつて 「源、頼朝、十四」源内侍ノサマヨ したつてみはたら口つ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

したね 「天、廿六、後久我太政大臣」したねするなるのわかれはなやあ

にしたるをたつ

したん 紫檀 「源、頼朝、十六」左はしたんのはとすはうのけそい

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

したん 「山家、下」「見るもつきはうなははく、ををうううううのから

しなほ…しなほ

しなら…しなめ

二千二百七十四

しなほす 「源朝野群三」しなほす所ま入所なまきたてて所々なほしなほす侍る

しなへ 「夫、一若菜、後頼」もかみ川うきまはゆるるるのうれせつみしててそこのみゆめり「源、明石、四十六」わたつみにしなへらおれひるの子の足た、さうし年はにけり ○契沖云「萬」十五、十七 於君戀之奈斐浦瀧吾居者秋風吹而月斜焉「同」第二人丸ノ歌ニ夏卿 思斐而といるしなへなりニ、しなへをたる字にてなゆるなりしなへ書はかたがたり 〇萬代戀二小大進「かさねてし」も「一本」よはの衣手なれぬはしなへらおれ人を待る「同、雜四、知家」草枕月かたさめこよひもやしなへらおれ御あかると「萬、三、廿二」眞木葉乃之奈布勢能山之奴波受而わがこえゆけは木葉しりけむ「同、十、十五」いゝめに今も見てし秋はのしなへてあらむ妹がすがた

しなごのかせ 科戸の風のこと也「延喜式、廿四」六月晦科戸乃風乃天八重雲吹放事乃如久「源、朝顔、六」あな心うそのみの罪はみなしなごの風たたくてそこのたまふ風の名なり

しなごめ 「源、玉葉、七」此君ねむのひ給まは母君よりのしなごめは父もとの筋のしなごめは品たかくしつてはなり「同、九、十」たらの山の吹を猶世に見えぬ花のまなはるのまなはる品たかくしなごめは花にやあははなるかたにまなしき方はいと面白き物にならけり「同、草木、

しなごめ 「源、早慶、十七」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

五人の品高く生れぬれば人にもてかしつかれて
しならひ 「源、淨舟、三十」よろづ右近をそらごとしならひける
しなぬ 指南「文撰、一」東京賦 幸見指南於吾子
しなのなし 信濃梨子「宇津保、藤開、中、十五」しのかねむすびやくるにしなのなしほしなつめなど入て
しなぐたる 「徒然、一段」しなぐたり顔にくさげなる人にも立まじりて「孝徳紀、九」大夫以上各有三差降
しなやか 「源、夢澤橋、十四」いとしなよげにしなやかなるわらはのまなすさうをきたるをあひみ來たる ○契沖云、長袖風纏と文選にみえたり
しなごころ 品心「源、若菜、上、七十七」さふらふ中に品ごころすぐれたるかきりをそりてつかうまづら給ふ
しなごころ 「源、早慶、十七」しなごころは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを
しなごめ 「源、玉葉、七」此君ねむのひ給まは母君よりのしなごめは父もとの筋のしなごめは品たかくしつてはなり「同、九、十」たらの山の吹を猶世に見えぬ花のまなはるのまなはる品たかくしなごめは花にやあははなるかたにまなしき方はいと面白き物にならけり「同、草木、

しなごめ 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなごめ 「源、玉葉、七」此君ねむのひ給まは母君よりのしなごめは父もとの筋のしなごめは品たかくしつてはなり「同、九、十」たらの山の吹を猶世に見えぬ花のまなはるのまなはる品たかくしなごめは花にやあははなるかたにまなしき方はいと面白き物にならけり「同、草木、

しなごめ 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなごめ 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなごめ 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなご…しなご

しなご…しなご

二千二百七十五

みづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなご 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなご 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

しなご 「源、朝野群三」しなごめは地ほのみづうみこ舟のまなはらねどもあひみしもの 〇「古事記傳、廿三、廿八」にほりりの近江の海に云々あるを心得誤りて近江、海の枕詞にほりり云々のあはれしなごめ云々を云々を、一に混り誤りてよめるなればはなごめか論を足らぬなるを

